岩見沢東高等学校　男子テニス部通信　　２０１６．４．２０．

Ganto Tennis　第５９号

文責：佐々木雄介

春季ダブルス　総括

春季大会のダブルスが終了した。全員が合格点の立派な試合をしたと思う。

１　時間の使い方（試合の流れを支配すること）

西條・戸田、辻・渋谷、岩花・佐々木が負けた試合（相手はすべて岩西）は、どれも接戦で、同じような試合展開。そんな試合での、４－４を４－５ダウンにされたり、５－５を５－６ダウンにされた後のエンド交替の際、岩東ペアは先にコートに入り、相手が来るのを待っていた。西條・戸田、辻・渋谷が負けた試合では、ベンチに戻って休むこともせず逆エンドに直行したのだ。ゲームを落としたことが悔しくて、アドレナリンがドクドク分泌され、カッカしながら「オイ、早くやろうぜ！」と催促しているみたいだった。でもどうだろう。互角の実力、接戦の中で、試合の流れは明らかに相手に傾いていた。だったら一度頭を冷やして冷静になり、流れを引き戻す時間が必要だったんじゃないだろうか。流れがいいときにはトントン進める。悪いときは時間を使って流れを変えるべきなのだ。

失点したときやゲームを落とした後は時間を使え。得点したときやゲームを取った後は、多少疲れていても、すぐに次のプレーを始めろ。これはセオリーである。

２　ストレートへの対応（センターセオリー）

彼らは今回もストレートを多用してきた。何の対策もない丸腰の岩東ペアに対して、セオリー無視の攻撃はいくらでも通用した。彼らはさぞや気持ちよかったに違いない。ここで考えなければならないのはセンターセオリーである。要するに、ストローク（サーブ）がセンターに入れば、相手後衛は返球できる角度が狭くなり、味方の前衛はポーチに出やすいということ。相手後衛がポーチを嫌がってストレートに返そうとすれば、センターからのストレートは、ワイドから打つよりもサイドアウトしやすい、ということ。

ストレートを多用する相手への 2nd サーブは出来るだけセンターに集めろ。味方後衛の速い 1st サーブがセンターに入ったら、前衛は迷わずポーチに出ろ。（フライングも OK。相手のストレートはサイドアウトしやすい）。

戸田のリターンがたくさんポーチにかかった。相手前衛は、戸田がストレートに打ってこないことを見越したかのように飛び出してきた。そんな相手には、早めにストレートに打っておかなければならない。「オレは時々ストレートに打つよ」と意思表示しておけば、相手はあんなにたくさんポーチに出られず、もっと楽にクロスに打てたはずだ。「ミスしてもいい」という余裕の中で、ストレートに１本打ち込んでおくことの意味は、センターセオリーの裏返しでもある。センターにクロスを打ちやすくするために、相手前衛にストレートを警戒させろ。ストレートを怖がる前衛は、ポーチに出られないのだ。

３　反実仮想（・・・・・ましかば・・・・・まし）

勝って「俺たちの方が強い」と勘違いしていたとしたら、支部大会での勝利は危いものになったはずだ。でも負けた。お前たちは彼らより弱かったのだ。ただ、その差はほとんどなかった。たぶん今、彼らはお前たちとは戦いたくないはずだ。でもお前たちはどうだ？明日にでも試合をして、借りを返したいんじゃないのか？じゃあ motivation は勝ってる。